

命題に対する確率論的・情報理論的アプローチがもつ可能性

浅利 みなと (Minato Asari)

東京都立大学 大学教育センター/人文科学研究科

自然主義的意味論の企ては、志向性に代表される表象や記号、シグナルがもつとされるさまざまな意味論的性質を、因果や自然法則、情報といったより存在論的に基礎的と思われる概念によって、発生論的に説明しようとする試みとして理解できよう。この企てのなかではほぼ常に障壁となってきたのが、いわゆる誤表象の問題、およびそれと不可分の選言問題であることに異論もないだろう (Fodor 1984; Godfrey-Smith 1989)。誤表象がそもそも問題となる背景には、表象には真偽を割り当てることができるという哲学者の直観があると思われる。この直観はいわゆる命題がもつ真理適合性 (truth-aptness) を、広く一般に表象に対して当てはめことに由来していると考えられる。

本報告は、表象一般が真理適合性をもつという素朴な直感を捨て、Skyrms (2010) に代表される確率論的・情報理論的なアプローチがもつ可能性を提示する。このアプローチのもとでは、表象がもつ内容とは事態に対する何らかの値 (シグナルが送られる前後の各事態の情報量の差や、シグナルが送られたもとでの各事態の事後確率等) を要素としてもつベクトルとして表現される。このアプローチのもとでは、表象はもはや明確な真偽を割り当てることができる措定物ではなくなるうえ、Birch (2014) によっても指摘されている通り、伝統的に期待されてきた仕方で誤表象の問題を説明することができない。しかし、本提題はこの帰結がこのアプローチがもつ欠点ではないと主張する。むしろ、非ヒト動物の「言語」が真理適合性をもつと考えを捨てることを提案する。具体例の分析を通じて、この提案が突飛なものではなく、むしろ自然科学、特に生物学において問題となる動物シグナルの分析との親和性という観点からも好ましい方向性であることを論じる。

参考文献

- Birch, J. (2015). "Propositional Content in Signalling Systems," *Philosophical Studies*, 171(3), pp. 493–512. <https://doi.org/10.1007/s11098-014-0280-5>.
- Fodor, J. A. (1984). "Semantics, Wisconsin Style," *Synthese*, 59(3), pp. 231–250. <https://doi.org/10.1007/BF00484945>.
- Godfrey-Smith, P. (1989). "Misinformation," *Canadian Journal of Philosophy*, 19(4), pp. 533–550. <https://doi.org/10.1080/00455091.1989.10716347>.
- Skyrms, B. (2010). *Signals: Evolution, Learning, and Information*, Oxford: Oxford University Press.